



「思想のあり方について」を，過去・ 現在・未来へと読み広げる試み



丸山眞男 『日本の思想』

(岩波新書 434, 1961 年) 所収 4 編の論考のうち III

平成 22(2010)年 10 月 29 日 (土) 上田仮説サークル例会用，柳沢克央やなぎきわかつひろ



もくじ

§ I. 「思想のあり方について」要約(1～9 ペ)

やはり、「《である》ことと《する》こと」と同様に、本論考もヘーゲルの弁証法の論理展開の形式に則っていることが分かった。また、本稿では「起承転結」の展開形式も読みとれる。特に本稿では対比的な事象間での相互倒錯的な「逆説」の例が多数紹介されている。レトリックの模範として学ぶべき事が多い。

§ II. (引用紹介) さまざまな予想論・認識論・科学論等の歴史的変遷(9～14 ペ)

ヘラクレイトス・ヘーゲル・コント・マルクス・サマヴィル・武谷三男・丸山眞男・三上豊男・板倉聖宣氏・鈴木敏文・戸田忠雄氏の言説を歴史的・全体的に俯瞰し、その変遷に学ぶ。

§ III. 「《鳥瞰》をモンタージュ的に合成していくテクニックと思考法」の例(14～16 ペ)

1982 年に板倉聖宣氏 (当時・国立教育研究所物理教育研究室長) によって提唱された「イメージ検証授業」理論の適用範囲は非常に広い (自然科学・社会の科学全般)。提唱から 30 年近く経過した現在でも、その新鮮さと効力は少しも色褪せていない。仮に丸山眞男氏が生きているとして、この文章を読んだとしたらどう評価するだろうか。

§ IV. キッシンジャー・周恩来 極秘会談記録 (産経新聞より) (16～24 ペ)

1971 年の極秘会談記録。世界史上にその名を残す二人の「戦略家」による冷徹な情理理解は 40 年後の極東情勢を分析する上でも、極めて多くの示唆を与えてくれる。

付録。大阪地検特捜部証拠隠滅捏造事件「法治国家の根幹揺らぐ」、立花隆氏の評論 (信毎) 秀逸な時評であると同時に秀逸な科学論でもある。



— I. 「思想のあり方について」本文要約 —

1. 人間はイメージを頼りにして物事を判断する(36行, 以下行数のみ略記) [イ]=正

人間は環境に適応するために、あらかじめ個々の人間, ある集団, ある制度, ある民族などについて, それぞれ持続的なイメージを作り, それを頼りにして(潤滑油のように用いて)行動する。われわれの環境がますます多様になり, 世界的に広がった現代では, イメージと現実とがどこまで食い違っているか, 自分自身で感覚的に確かめることができない。環境が複雑になるにしたがって, われわれと現実の環境との間に介在するイメージの層が厚くなっていく。潤滑油だったものがだんだん固形化して厚い壁をつくってしまう。

2. イメージが作り出す新しい現実(28) [イ] 「イメージの《ひとり歩き》」

イメージというものは, だんだん層が厚くなるにしたがって, もとの現実と離れて独自の存在に化する。つまり, 原物から別の, 無数のイメージ(化けもの)がひとり歩きしている世界の中にわれわれは生きていると言っても過言ではない。しかも, 人々が抱く共通のイメージが非常に広がってくると, 化けものの方が本物よりもリアリティをもってくる。本物自体の全体の姿をわれわれが感知し, 確かめることができないので, イリュージョンの方が現実よりも一層リアルな意味をもつという逆説的な事態が起る。

3. 新しい形の自己疎外(15) [イ] 《ひとり歩き》の極端な具体例

かつてマルクスが, 「私はマルクス主義者でない」と言った。或場合には, イメージが自分を離れてひとり歩きすることについて, 原物の方が自分についてのイメージに逆に自分の言動を合わせていくという事態がおこる。現代にはこうした新しい形態の自己疎外が起こっている。

4. ササラ型とタコツボ型(48) [サ], [タ] 《ササラ型》, 《タコツボ型》分類の紹介

近代日本の学問・文化・いろいろな社会の組織形態というものが(共通の根が先端部分で細分化された)ササラ型でなくて(孤立した各部が並列している)タコツボ型であることが, 先の「イメージの巨大な役割」と関係してくる。

19世紀末には学問の個別化・専門化・独立化が急速に進んだ。たとえば, 19世紀前半では法律学・経済学・社会学など包括的・総合的な学問体系であったが, 後半で *the social science* が崩れてもろもろの *social sciences* になった。

この変化を象徴的に示しているのが形式社会学の成立と、その相似形としての「日本内務省からの各部門の独立と内務省の縮小」。

5. 近代日本の学問の受け入れかた(38) サ, タ 両者の歴史的必然性についての解説

日本がヨーロッパの学問を受け入れたときは、ちょうど学問の専門化、個別化が非常にはっきりした形をとるようになった段階であった。ところが、ヨーロッパの学問はもともとササラ型。ササラにある共通の根を切りすてて、ササラの上の端の方が個別化された形態が日本に移植され、それが学部や科の分類となり、学界の当然の前提となった。

(これはちょうど開国の時期が19世紀後半だったということのほか、和魂洋才=東洋の道德・西洋の技術というような二分法をイデオロギー的に受けついで明治の国家体制にはそうした学問形態の方が都合がよかったから)

つまり、ヨーロッパの学問の根底にあって、学問を支えている思想あるいは文化から切り離され、独立に分化し、技術化された学問のワクのなかに、はじめから学者がスッポリとはまってしまった。ここでは大学教授も含めて、学問研究者が相互に共通のカルチュアやインテリジェンスでもって結ばれていない。おのおのの科学をほり下げていくと共通の根にぶつからないで、各学科がみんなタコツボになっている。

自然科学者と社会科学者との間に「われわれは本質的に同じ仕事をやり、同じ任務を持っている」という連帯意識というものが非常に乏しい、いや大学や学界の哲学と社会科学というものの間にも内面的な交流が殆どない。哲学というものは本来、諸科学を関連づけ、基礎づける任務とするもの。ところが、近代日本では哲学自身が一少なくともアカデミーの世界では専門化し、タコツボ化した。哲学自身^{そかく}が専門化することとは、ある意味では矛盾だが、そうになっている。

本来密接な関連を持つ学問分野の間でさえコミュニケーションがあまりない。いわんや文学畑と社会科学畑との間ということになると、^{そかく}疎隔がもつとはなはだしく、共通の言葉が非常に乏しい。(1~5=「起」)

6. 共通の基盤がない論争(41) タ=反 《タコツボ型社会》の具体例

最近、昭和史について文学者と社会科学者・歴史学者との間でいろいろな論争が行われた。「この本には歴史が《書けて》いる」とか「《書けて》いない」という論争をしている。このことについての文学者の「理解」と社会科学者の「理解」が非常に食い違っている。そもそも「歴史が《書けて》いる」ということ自体の意味についての一致した了解がないのだから、なかなか共通の基盤に立った論争にならない。

もつとはなはだしい例がある。ある著名な文学者と著名な社会科学者との間に平和論

争というものが行われた。その著名な文学者がその社会学者について「なんと頭の悪い人だろう」という意味のことを言った。ところがその社会学者は過去に非常にりっぱな業績を上げた人物であり、頭が悪い人とは考えられていない。

文学者が「頭がいい」というときの「頭」と、社会学者が「頭がいい」というときの「頭」というものは、必ずしも同じでないことが、はしなくもこの論争でハッキリ現れた。これくらい象徴的に、日本の知識人の間に共通の言葉なり、共通の基準がないという例を極端にしめしたことはないだろう。

新聞の匿名欄で攻撃される「知識人あるいはインテリ文化人」と石川達三氏が攻撃している「日本のインテリ」とは、どう見ても同じもののようには思えない。攻撃の論拠も正反対であり、一方では飲み屋でくだを巻いてばかりいて天下国家の問題から逃避しているといつてしかられている。他方ではなんでもかんでも天下国家の問題にくっつけてしまう、政治に関係のないことまで政治が悪いせいにしてしまうのが日本のインテリであるといつて悪口を言われるということになると、攻撃されている日本の「インテリ」たるもの当惑せざるを得ない。

両者のインテリについてのイメージが全く違っているからこういうことになる。つまりそういう「知識人」についてのイメージが人によって違う。そうして、攻撃するときにはめいめい、日頃自分の周囲に見聞する眼ざわりなインテリの行動を捉え、それを普遍化して「日本のインテリは」といつて批判する。だからそういうとき攻撃しているご当人はけっして知識人あるいは文化人の範疇に入っていない。これもつまりは共通のカルチュアで結ばれたインテリ層というものが存在しないタコツボ型社会の反映ではないだろうか。

7. 近代的組織体のタコツボ化(27) タ タコツボ間のディス・コミュニケーション

日本ではヨーロッパにおける教会・サロンという役割をするものが乏しく、したがって民間の自主的なコミュニケーションのルートがはなはだ貧しい。

明治以後、近代化が進むにつれて、封建時代の伝統的なギルド、講、寄合に代わって、近代的な機能集団が発達する。こういう組織体は会社であれ、官庁であれ、教育機関であれ、産業組合であれ、程度の差はあるが、それぞれ一個の閉鎖的なタコツボになってしまう傾向がある。巨大な組織体が昔の藩のように割拠するということになる。

総合大学とは日本の場合、実に皮肉な言葉だ。すなわち、総合的な教養が与えられるわけでもなければ、各学部の共同研究が常時組織化されているわけでもない。ただ、一つの経営体として地理的に一つの地域に集中し、大学行政面で組織化されているにすぎないため、ユニヴァーシティという本来の意味から甚だ遠いのが実情である。

8. 組織における隠語の発生と偏見の沈澱 (35) [タ]

日本における構造的問題

日本におけるこういう組織なり集団なりのタコツボ化は、封建的また家族主義といわれるが、前近代的なものが純粹にそれ自体として発現しているというより、実は「近代社会における組織的な機能分化が同時にタコツボ化として現れる」という「近代と前近代との逆説的な結合」として捉えなければならないのではないか。

ともかく、各集団がそのメンバーをまるがかえにする結果、いわば組織の内と外というものが、いわゆるインズ（内輪）とアウト（よそ）というものが峻別されることになる。タコツボ化というものは無限に細分化されるわけだから、したがって、また何が内であり何が外であるかということもまた無限に細分化される。

会社であれ、大学であれ、組合であれ、当然「うち」同士だけで通用するいろんな価値基準なり、言葉というものが発生し、そこから集団内部の言葉の隠語化がおこってくる。その集団の内部だけで通用するものの考え方感じ方が発生し、しかもそれがだんだん沈澱してくる。つまり、それぞれの組織的な集団が、こういうふう沈澱した思考様式というものをみんな持つようになる。そこに組織としての偏見がそれぞれに抜きがたく付着するということになる。

9. 国内的鎖国と国際的開国 (14) [タ]

タコツボは個々に世界に向かって開かれる

組織のタコツボ化は「クローズド・ソサエティ」という言葉で置換してもよい。ただ、日本の場合に注意しなければならないことは、現在の日本全体として「クローズド」ではないということ。日本全体としてはむしろ「八方破れ」で、世界中に向かって開かれており、日本の国内の集団が個々にタコツボ化して、それぞれのタコツボ化した集団がインターナショナルには外に向かって開かれているということ。

つまり、日本自身はクローズド・ソサエティのように横に等質的なコミュニケーションがなくて、かえってそれぞれの集団がそれぞれのルートで、外のインターナショナルなルートとつながっているという非常に奇妙な状況が見られる。(6~9=「承」)

10. 「被害者意識」の氾濫 (51) [イ], [タ] 「イメージひとり歩き」, 「タコツボ」相乗効果

吉田茂氏が数年前に全面講和を唱えた著名な学者のことを「曲学阿世」という言葉で罵倒した。おそらく日本で圧倒的な力をもつ進歩的勢力に取り巻かれている、われわれは今こそ、とうとうたる俗論に抗して嵐の中のともしびを守ってるんだというつもりだろう。ところが反対の立場から見ると全然事態は逆であって、そういう人たちの基本的な考え方なりそれをささえている勢力なりの方が圧倒的に強く、また少なくとも現在は積

極的意見としてでなくとも、消極的な同調として多数国民の「支持」をあてにできる状態にある。

こういうふうには保守勢力さえ、「被害者意識」をもっているのだから、進歩的な文化人の方はなおさら、マイノリティとしての被害者意識がある。保守勢力も進歩主義者も、自由主義者も民主社会主義者も、コンミュニストもそれぞれ精神の奥底に少数者意識あるいは被害者意識をもっている。それだけ全体状況についてのパースペクティブ（展望）が、くいちがっている。

日本ではとくにマス・コミの画一化作用は強大だが、個々の新聞人に会ってみると、けっして彼らは「マス・コミ万能意識」を持っていない、むしろ、逆に一般的に新聞批判に対して非常に神経質、神経過敏になっている。

また、日本を牛耳っているのは官僚だということも多くの人々の常識になっている。ところが、局長や部長級の役人はやはり「被害者意識」だ。外の社会から見ると官僚は現在非常に巨大な権力を握っていると思われるが、党の役人そのものは支配者というか権力者というか、そういう意識というものは驚くほど持っていない。むしろ、役人というものは非常に割の合わない仕事だと本気で思っている。

こうなると、国中被害者ばかりで加害者はどこにもいないという奇妙なことになる。こういう意識がどの程度にイリュージョンかということは差し当たっての問題ではない。自分の「世の中」への期待が、マス・コミを通じて伝達される出来事と一緒にあって他の勢力あるいは集団についてのイメージを生み、それが四方八方から人間をとりかこんでいるところ、しかも人間関係がタコツボ型でその間の自主的なコミュニケーションがないところでは、おのずからこういう事態が生まれるということ。

11. 戦後マス・コミュニケーションの役割 (31) イ, タ

マス・コミュニケーションのまっただ中におけるディス・コミュニケーション

戦前の日本では、きわめて大ざっぱに言えばこういうタコツボ化した組織体の間をつないで国民的意識の統一を確保していたものが天皇制であり、とくに義務教育や軍隊教育を通じて注入された「臣民」意識だった。こういうむすび目が戦後にほぐれてしまうと、共通の言語、共通のカルチュアを作り出す要素としては何といてもマス・コミが圧倒的な力をもつということになる。

各集団がタコツボ的になればなるほど、タコツボ相互のコミュニケーションというものが行われなくなるから、タコツボ間をつなぐように見える唯一のコミュニケーションがいわゆるマス・コミュニケーションということになってくる。

日本のコミュニケーションの構造というものはちょっと複雑で、マス・コミュニケー

ションのまっただ中におけるデイス・コミュニケーションという逆説的な構造を持っている。マス・コミュニケーションが一方において巨大な力を振るうと同時に、おのおのの集合体がそれぞれの言語をもち、その間での自主的なコミュニケーションが甚だ乏しい、したがってこうしたデイス・コミュニケーションとマス・コミュニケーションが矛盾しないで、両方が同時に高度になり、互いに因果をなして強めあうという結果になる。

タコツボ間をマス・コミュニケーションがつなぐとあったが、それは文字通りタコツボの間に作用するだけで、タコツボの中に滲透し、その相互間の言語の閉鎖性を打破する役割はあまり演じない。本来、マス・コミュニケーションというものは、孤立した個人、受動的な姿勢をとった個人に向って働きかけるものだから、組織体と組織体との間の言語不通という現象を打開する力には本来乏しい。

こうして、組織内ではそれぞれ「プライベート」な隠語が、広く社会的にはマス・コミの「公用語」が相並んで通用するということになる。

12. 組織の力という通念の盲点 (32) イ, タ 矛盾の拡大

①われわれと環境との間にイメージという歴大な層があるという現実、②日本におけるあらゆる集団、共同体であれ、あるいは近代的な集団であれ、あらゆる集団のタコツボ化というこの現実というものを十分ふんまえて出発するということがいろいろな意味で大切なことであるにもかかわらず、とかくそういうことが忘れられがちになる。

これにより、第一にその組織の中で通用している言葉なり外部の状況についてのイメージなりが、組織の外でどれだけ通用するかということについての反省が欠けがちなる。そこから組織内で通用している言葉を組織の外でその有効性をためしていくという努力が忘れられ、つまり、イメージの層がいかに厚く、いかにくいちがっているかという現実が忘れられ、単に組織対未組織という問題、あるいは単にそれはまだ組織外の人が「真理」に到達していないんだという問題に帰着させられる。従って「自分たちがもつイメージとくいちがったイメージはみんな誤謬なんだから、《啓蒙》して、自分たちのイメージを普遍化すればいいという考えにおちつく。それが全体状況についての判断を誤らせ、説得しても甚だ有効でない結果をまねいているのではないか。

それから第二に、ササラ型の社会のように共通の基盤があれば、労働者階級の一つの組織が強大になり、あるいは一つの組織が前進するとすれば、それは結局共通の根を通じて他の組織化を促し、それを前進させることになる。ところが、タコツボ型の社会では、他に広がっていくダイナミックスを持っていないので、一つの組織の前進が、ときにはかえって他の組織との連帯性を破壊する結果となる。しかも、タコツボ化というものは無限に細分化されるので、組織内部のある部門と他の部門にも上記のことがあては

まる。極端な場合にはその組織の力、あるいはその組織の進歩性というものは少しもそこなわれないうで、そのまわりからすっかり切りはなされ、絶海の孤島のように浮き上がってしまいという事態が十分起りうる。(10~12=「転」)

13. 階級別にたたない組織化の意味(18) 止揚=階級別にたたない組織化への道

革新勢力のリーダーシップの任務というものは、今までと違った思考法というものを必要にするのではないか。つまり、階級的な同一性に立った組織化と同時に、それと違った次元に立ったいろいろな組織化の方法をできるだけ多く組合わせて積み上げていかざるを得ない。それは単にマテリアルに力を強くするためだけではなく、一つの組織の思考法が固定し、沈澱するのを防ぎ、いろいろなイメージを合成しながら、もっとも流通度の高い言葉を見出して行くためにも必要である。

いろいろちがった組織化のダイメンジョン(次元)を投入していくことは経験的には、やっているわけで、むしろ戦後に国民的規模で成功した組織化は原水爆反対運動にしる、母親大会にしる、ほとんど、いわゆる階級的組織化ではないといっても言いすぎではない。しかしそれがどういう思想的な意味を持っているかということは、必ずしも十分に反省されていないのではないか。このことの意味を反省しないと、単にそれはその場その場のご都合主義、場当たり主義に陥ってしまう。

14. 多元的なイメージを合成する思考法の必要(21) 合=モンタージュへの期待

われわれの社会における言語が組織の多元化と並行して複数的になるということ、それからイメージ自身が、それがどんなに元来の対象から離れていても、そのイメージなりに社会的に通用して、独自の力になっていくという、この基本的な事実から出発して、全体状況についての鳥瞰をいわばモンタージュ式に合成していくような、そういうテクニックとか思考法というものを、われわれが要求されているのではないか。

これは同時に社会科学の問題でもある。原理とか原則とかの真理性というものによりかかっているだけではすまされなくなった。つまり、これがほんとうの「真理」なんだ、あとはみんなイリュージョンなんだといって安閑としていると、「イリュージョン」がどんどんあらたな現実をつくっていき、「真理」の方を置いてきぼりにして、現実が進行してしまうという状況の中にわれわれはおかれている。

ちょうど犯人を捜すときに、犯人を見たという人々の印象からモンタージュ写真を作成するような操作が学問の方法の上でも考えられなければならない。原理原則から天降るのでなしに、いわば映画の手法のように、現実にある多様なイメージを素材として、それを積み重ねながら観客に一つの論理なりアイデアなどを感得させる方法を、

もっと研究することが大事ではないか。(13~14=「結」)(要約以上、下線は柳沢)

— II. 予想論・科学論・認識論の歴史的変遷 —

◎ヘラクレイトス (B. C. 540?~B. C. 480?・希) の「予想論」

予想しなければ、予想外のものは見出せないだろう。それはそのままでは捉え難く、見出し難いものなのだから。(『ヘラクレイトスの言葉』田中美知太郎訳、弘文堂アテネ文庫、1948年)

◎ヘーゲル (1770~1831・独) の「予想論」

経験において重要なことは、どんな精神をもって現実に向かうかということである。偉大な精神は偉大な経験をし、さまざまな現象のうちに真に重要なものを洞察する。(ヘーゲル『小論理学』第24節補遺3、村松一人訳、岩波文庫、1951年)

◎オーギュスト・コント (1798~1857・仏) の「予想論」

◇私達がものを知るのは何のためか。前もって知るためだ。前もって知るのは何のためか。準備するためだ。(澤瀉久敬訳『哲学と科学』日本放送出版協会、1967年)
◇見ることは知ることである。知ることは予見することであり、予見することは統御することである。(サマヴィル『科学入門—科学の方法と歴史—』白揚社、市井三郎訳、1961年)

◎マルクス (1818~1883・独) の「予想論」

蜘蛛は織物師の作業に似た作業をおこない、また蜜蜂はその蠟製の巣の建築によって、幾多の人間建築師を赤面させる。だが、もっとも拙劣な建築師でももっとも優秀な蜜蜂よりもそもそもから優越している所以は、建築師は巣を蠟で建築する前にすでにそれを自分の頭の中で建築しているということである。(マルクス『資本論』第1部、長谷部文雄訳、河出書房、1964年)

◎サマヴィル (1882~1949・英) の「予想論」

予測が重要であるのは、それが実際的な応用をもたらすから、という理由だけではなく、われわれの理論や説明の真理性を験してくれるからなのです。予測が間違っているとわかれば分かるほど、その理論はより多くの欠陥を持っています。そして予測が正しいとわかれば分かるほど、その予測をもたらした理論はより確実となるわけです。

(サマヴィル『科学入門—科学の方法と歴史—』白揚社，市井三郎訳，1961年)

◎武谷三男（1911～2000）の「共通の基盤がない論争」体験＝**タコツボ**との遭遇体験

…下村寅太郎（1902～1995）のごときは、私が現代物理学に携わっている者の立場からカッシーラー（1874～1945・独）哲学に対しての不満を述べたとき、私の哲学者への攻撃をまるきり形式的に反射して「武谷のカッシーラーの理解は浅薄である」と書くことによって復讐できたものと思っただろう。私がカッシーラーを理解しようとするのはたいした問題ではない。しかし物理学を論じる哲学者が物理学を理解していないという事はこれは致命的である。これらの哲学者たちはむしろ私共の現代物理学における悩みや、哲学に対する現実の場面からの不満を素直にきいて、これによって自らの哲学をむしろ豊富にすべきであったのではないか。私どもにとってはカッシーラーが物理学の解釈において失敗したということが重要なのであって、カッシーラーの体系をどの程度に深く理解するかということは大した問題ではないのである。以上のような哲学者の態度というものがどこから来るかということは、哲学に関心をもつものとして十分に考えてみなければならないことである。（武谷三男著作集1『弁証法の諸問題』勁草書房・「哲学はいかにして有効さを取戻しうるか」より・1968年出版・ただし、「哲学はいかにして有効さを取戻しうるか」は1942年10月26日・日本科学史学会常会において「現代物理学と科学史の方法」と題して報告したものを元に著している）

◎武谷三男（1911～2000）の「認識論」論 **タコツボ**から**ササラ**へ

一つの認識論を主張する人は、その認識論をあらゆる局面にわたって馬鹿正直に適用することを私は要求するのである。そうすれば直ちにこれまでの大抵の認識論は、もはや一歩も進めなくなってしまうのである。そしてその場合とくに重要な事は、科学の現在の問題に対して、現在の困難に対して右に行くべきか左に行くべきかの指導を求むることである。この現在の瞬間にかける問題は、過去ほど問題が簡単ではないのである。過去は最初に言ったように、いかなる理論を以てしても自己の理論に都合のよい材料をひろい出して来ることができる。しかし**現在直面している問題**というものはこのような選択をゆるさないの**であって、必ず右すべきか左すべきかという事に解答を与えねばならない**。過去の事実に対しては、その後の歴史的発展を自己の理論に都合よく解する事によって、その事実をいかようにも理屈づける事ができる。しかし**現在の課題**に対する**解答は勝手な解釈をゆるさない**のである。それ故にあらゆる哲学は、この問題に冒険し、その結果に責任を持つことによるのみ、哲学は自己を有効にする道を見出すのである。科学史の哲学、科学史の方法論というと、いかにも過去の事実のみを扱う

ようであるが、実際にそれらが鍛えられるためには、現在の科学の発展を分析する事が絶対に必要なのである。（出典・同上）

◎丸山真男（1914～1996）の「政治学廃業」告白

〔高度成長をぜんぜん予言していない。それはぼくだけじゃないけれども。高度成長後にどうなるかということはまったく……、そもそも高度成長を見越してないんですから、これは最も誤った点です。こんなに豊かになるとはおもいもよらなかった。ぼくが政治学を廃業したのにはいろんな原因があるけどね（笑）〕（強調は中野氏）……（中略）……〔もう、まったく予測を誤った点はそこ（日本の高度経済成長が政治的関心ではなく政治への無関心をもたらしたこと）です〕と丸山は答え、戦後デモクラシーを支えるのは自発的結社としての労働組合であると信じて、その活動に期待を寄せていたこと、その期待が〔組合官僚化と、ある意味での労働貴族化〕によって裏切られたという苦い思い出を口にしている。（中野雄『丸山真男・人生の対話』文春新書 763, 2010 年）

◎三島由紀夫（1925～1970）短編「大臣」（1948）に見られる「相互倒錯的な逆説」の例

……国木田兵衛が世界で一番きらいなものが官僚でその次が酢だった。酢のものはおろか、寿司もよう喰べなかった。官僚がきらいで大臣になったのは何故かという、大臣は官僚ではないと信じているからだった。誰が猿廻しを猿だといえよう。よしんばその関係が逆だとしても、誰が猿を猿廻しだといえよう。彼はこの最初の機会に、官僚を念入りに揶揄してやりたかった。彼らが揶揄われていると気づかないことで彼ら自身を一そう愚かに見せる・そういうからかい方があれば、それに越したことはなかった。こうまで就任演説を自分で書くことを固執したのもその腹案があるからだった。……（三島由紀夫短編集『ラディゲの死』新潮文庫，1980 年）

◎三上豊男（1927？～）の「科学論」

私に科学の精神を語り、仕事をすすめてくださった師（福田四郎先生）は私が初めて教師として着任した高校の歴史の先生であった。「学問の価値は予言にある」，「普遍性を追求せよ。特別なものに関心を寄せるな」，師の口から幾度この言葉を聞いたことだろう。師自身は造詣のふかかった民俗学の分野で人間の心に潜む普遍性を追求しておられた。まさに学問に境界はない。分野は異なっても、師の思想が私を仲介として本書の形で紹介されたことを心より嬉しく思う。…（中略）…

化学に限らず、何を学ぶにしろ一つの小部分のみをいくらかわしく勉強しても真の理解は得にくいものである。真の理解というものは、全体における部分の位置が明確に認

識されて、はじめて達成されるものである。

これは一見矛盾した議論であって、部分の理解さえ容易でないのに、どうして全体が理解できるのかと思われるであろう。

しかし、この逆もまた真理なのであって、むしろ個々の小さな部分にこだわるよりは、つねに大きく全体を理解するように心がけることが必要である。「部分を理解するためには、まず全体を理解せよ」。これこそ科学を貫く精神なのである。(三上豊男『スグわかる化学反応の系統学習』, 三省堂, 1988年)

◎板倉聖宣氏(1930～)の「予想論」

私たちは一人の人物がある概念のもつ意味や、それらの概念によって抽象された事物に成立する一般的法則の内容が十分よく理解できたということをつぎのように考えるのです。すなわちそれは、その人がそれらの概念や法則を用いて、その概念や法則の適用する領域内にある未知の問題の答(実験の結果)がドンピシャリと100%予言できるようになったということを意味するものと考えます。

(板倉聖宣・上廻昭共著『仮説実験授業入門』明治図書, 1965年)

◎鈴木敏文(1932～)の「《仮説・検証》経営論」

過去の延長ではなく、一步先の未来からかえりみて何をすべきかを考え、挑戦する。これをブレイクスルー思考と呼び、グループを挙げて取り組んでいる。ブレイクスルー思考で仮説と検証のサイクルを絶えず回していく限り、組織は目まぐるしく変化する市場のニーズに対応できるはずだ。

もちろん、100%成功するとは限らない。しかし、成功する保証はなくても、七割方可能性が見えたら、挑戦してみることだ。(鈴木敏文『挑戦・我がロマン』日本経済新聞出版社＝日本経済新聞社掲載「私の履歴書」掲載稿に補筆したもの, 2008年)

◎戸田忠雄氏(1937～)の「認識論」その1

政治学や経済学は社会科学の一分野である。「社会科学」と言われる限り、科学性を持たねばならないが、それは自然科学でいう科学性と同一の意味内容を持ちうるであろうか。

我々が「科学的」というとき、自然科学におけるような客観性・法則性・普遍性を想定しているのである。しかし、政治学や経済学などの社会現象を対象とする学問は自然科学とは次のような点で異なる。

第一に、「太陽は東から昇り、西に沈む」というような客観的法則性を把握しにくい。

人間の意志の自由が入ってくるので社会現象について自然現象のように原因・結果という因果関係（因果律）でたどることは困難な面がある。

そして第二に、自然現象の場合と違って、社会現象に対しては、観察者自身の価値判断が否応なしに入ってくる。換言すれば観察者の世界観や思想と全く関わりなしに認識することが困難なのである。すなわち、認識と価値が分かちがたく結びついている。これを思考の存在被拘束性（K・マンハイム）という。

したがって、われわれは社会現象（特に政治）に対しては客観的にこれを認識することが非常に困難である。なぜならわれわれの社会的立場や利害がわれわれ自身に一定のイデオロギー（主観的・観念的思想）をもたらすからである。すなわち、自分のイデオロギーにもとづく価値判断（評価）がわれわれの認識の目を曇らせるのである。

この意味において、全ての人間は“偏向”を持っている。いや、偏向のない“不偏不党・中立”という立場はあり得ないのである。

われわれが社会生活を営んでいる以上、好むと好まざるとにかかわらず、あるいは意識するとしないとにかかわらず、一定のイデオロギーにより、相対的に偏向を持つのであり、それが現代人の宿命なのである。

それでは、われわれが社会現象に対してはイデオロギーを離れて客観的、普遍的に認識することは全く不可能なのであろうか。

われわれはみずからがイデオロギーによって社会現象を見ているということを自覚することにより、換言すれば、「すべての人が“偏向”を持っている」ということを自覚して初めて相対的にイデオロギーから自由になり得るのである。

「私は公平であることを約束できるが、不偏不党（中立）であることを約束することはできない。それは神のみに許されていることだ」（ゲーテ）（戸田忠雄「社会科学的認識とは何か」、長野県上田高等学校における「政治・経済」授業用原稿・1975年頃～）

◎戸田忠雄氏（1937～ ）の「認識論」その2

…ある一定の理論なりイデオロギーを先に定立して、それから現実を解釈していこうとするやり方ね。これがすべての間違いの原因だと気がついたのですよ。

たとえば、「資本主義が独占段階にはいると、その内部矛盾が拡大してついには全般的危機を迎えて、社会主義によって止揚されるのが歴史的必然である」というマルクス主義の有名なテーゼがあるでしょう。これによれば、資本主義はその内部矛盾により、人民の生活は窮乏化して危機を迎える→日本は資本主義国である→だから危機を迎えるはずだ…というわけですね。

だが、現実とは逆で、日本の国民生活はどんどん向上している。となると資本主義だか

ら危機を迎えるのではなくて、資本主義であるにもかかわらず、あるいは資本主義だからこそ繁栄するのだという考え方の方が事実在即していますね。同じように日米安保があるから戦争に巻き込まれるのではなくて、日米安保があるからこそ平和であるのかもしれない。

このように理論やイデオロギーが現実には反すれば、現実や事実のほうを尊重するのが、常識というものでしょう。その方がヨリ矛盾が少ないですからね。…（戸田忠雄「言いたい放題」・長野県上田高等学校生徒会誌『松籟』第23号・1976年）

— III. 《鳥瞰》をモンタージュ的に…の例 —

「全体状況についての《鳥瞰》をいわばモンタージュ式に合成していくような、そういうテクニックと思考法」（丸山眞男）にあてはまる具体例として、下記の手法は極めて重要である（柳沢）。

◎板倉聖宣氏「イメージ検証授業の提唱」（1982年）のうち、「基本的な予想の当たるものになるイメージを」より

…大人でも子どもでも一通り日本史を教わっている人びとに《日本歴史入門》の授業をやった記録をよむといつもおどろかされることの一つに、一揆と戦争の話があります。江戸時代の人口の増減の話になると「一揆に対する残酷な弾圧でたくさんの人々が殺された」ということが大きくとりあげられるし、明治期の人口の話になると「日清・日露の戦争による戦死によって人口がふえなかったのではないか」などという予想をする人が少なくないのです。大多数の人々は「歴史というものは、その大部分が庶民の平和な生産活動によって支えられている」ということを忘れて、一揆・飢饉・戦争という非常事態を中心に歴史をとらえる傾向が強いのです。これは地球が少しゆがんでいるという事実を目を奪われて、近似的には地球はまんまるといってよいことを忘れるのと同じようなまちがいといつてよいでしょう。これまでの歴史教育では、ともすると、歴史を動かす最大の原動力である人々の日常的な生産活動のことが忘れ去られ、それとくらべれば第二義的第三義的にしか意味をもたないことの方がむしろ記憶に残る形になっているのです。

こんなことをいうと、かえって「お前の歴史観の方がおかしいのだ。お前の江戸時代や明治時代についてのイメージの方がまちがっているのだ」といわれるかも知れません。それだからこそ私はいいたいのです。「それなら何をもってイメージの正否をきめるの

か」と。

江戸時代のイメージをどう思いえがくか、それは各自の自由ともいえるでしょう。しかし、それらのイメージがいくら正真正銘の事実だけから構成されたものであるにしても、そのイメージをもとにして未知の事実について予想をたてたとき、ほとんど正しく予想を立てられないとしたら、そのイメージはまちがっているといわなければなりません。

《日本歴史入門》の授業書は、歴史における生産力と社会関係の役割に焦点を合わせて作成した問題群からなっており、日本史についての基本的なイメージが正しければ大部分の問題についてほぼ正しい予想が選べるようになっています。ところが、これまで日本歴史についてかなりの知識を持っていると自負する人たちでも、予想の大きくはずれる問題が少なくないのです。それはこれまでの人々のえがいてきた日本史のイメージにまちがっているところがあるのではないかと思うのです。こんなことをいうと、またまた、「お前の問題の方がおかしいのだ。そんな特殊な例外的な事実を問題にして予想させても当たらないのが当たり前だ」といわれるかも知れません。

はたしてそうでしょうか。たとえば、「日本の人口の増大のはじまりは開港から明治維新の頃か、日清・日露戦争のころか」といった問題について、ふつうの日本歴史通の人々の多くは「日清・日露のころ」と答えるのですが、本当は開港から明治維新の頃なのです。どうしたわけか「日本の近代化・資本主義化は明治維新のころでなく、日清・日露の戦争のころになってはじまった」という知識が普及しすぎる結果、日本史通の多くの人々の予想はまちがえるというわけです（原文のママ）。こういうとまた、「人口などというものは特別だ」という反論もあるでしょう。

たしかに科学とちがって、歴史のようなもの場合はいろんな事柄が複雑にからみ合うので、いくら歴史的なイメージが豊富で正しくとも、いつも未知の事柄をドンピシャリと予想することができないのは当然のことです。そこで、人口の場合が特別なのかどうか私もしらべてみました。江戸時代からあった牛車や大八車の数や、佐渡や別子の鉱山の産出量もしらべてみました。みなさんはその結果はどうだと思えますか。じつはどの指数をとってみても明治維新前後から急速な増大現象を示しているのです。もちろん、日清・日露戦争のころを起点としてはじまった産業もあります。そういう分野ではそのころが起点となります。しかし、日本の近代化を全体として問題にするとすれば、やはり開港から明治維新のころを起点とする他ないでしょう。ところが、これも地球のイメージの場合と同じように期せずして狂わせられてしまっているというわけです。

そういう間違いをおこさせないようにするにはどうしたらよいか。じつは今回イメージ検証授業などというものをことさらにとりあげる必要を感じたのはこの事と特に

関連しています。「イメージ検証授業の場合、仮説実験授業の場合のようにそこで教えようとすることの正しさを科学の側から十分に保証することができない」といっても、なおかつ「その教育の結果もたらされるイメージの正しさは、そのイメージの他の基本的な問題への有効性によって判断されるのではないか」といいたいのです。

イメージ検証授業の場合は、そういう「他の基本的な問題について大なり小なり正しく予想できるもとなるようなイメージを作り育てることを基本とすべきではないか」というのです。イメージ検証授業の場合はそういう教材の良し悪しの基準を設けておかないと、とんでもない主観的な教育に墮するおそれがあると思うからです。…（仮説実験授業研究会編『授業科学研究』, No.12, 仮説社, 1982年）

前半以上